

伊藤虎丸先生のご退任にあたって

大久保 喬 樹

今年1月、伊藤虎丸先生の最終講義を予告するビラが学内各所に貼りだされた。恐らくは学生有志の手になるものと思われるそのビラには確か《虎丸吠える》というような文句が踊っていて、思わず微笑させられたものだった。《虎丸先生》、《虎さん》などと親しみをこめてよばれ、先生御自身は、ちょっとおどけて、「やあ、この頃は、昔ほど噛みつかなくなったし、猫丸というところかな」などとおっしゃっていたが、まことに名は(あだ名は)体をあらわすというか、伊藤先生は、まさに虎を思わせる骨太の気概と、それを自ら戯画化して楽しむ猫のようなユーモアの両面を備えた名物教授であった。

伊藤先生は1927年、東京に生れ、幼少期は、父上の勤務の関係で各地を転々とした後、44年旅順工科大学に入学した。しかし戦争による混乱のため十分な勉学もかなわず敗戦、やがて帰国の後、肺結核を発病して5年もの病床生活についた。苛酷な青春時代だったという他はないが、しかし、この時代が先生の人生にとっての転機になったようである。病臥中にキリスト教信仰に入り、そして、ようやく病癒えて一時就職した後、1953年、26歳にして東京教育大学文学部に再び入学、中国文学の道を志したのである。「ぼくは晩学なんだよ」とつぶやかれるのをうかがったことがあったが、この頃の経験が、先生の深い人間味の糧になったのだろうと私はおもうのである。

以後、教育大から東大へと場を移しながら研究をつづけ、63年広島大学に着任(中国語担当)、やがて大学紛争が生じると、大学改革活動に献身、とりわけ、一般教育のあり方に心を砕いた。73年和光大学に転任、同時に東京女子大学にも非常勤として出講を開始し、80年には和光を辞して本学日本文学科教授として専任となり、今日に至ったのである。

先生の研究上の専門は中国現代文学、とりわけ魯迅、郁達夫等、中国の近代化にかかわった知識人に焦点をあわせたものだったが、そこに一貫するのは、近代文明の根幹となる〈個〉の思想がどれだけ中国、日本等のアジア諸国に実現されたかという問題意識だった。そして、それは、専門学術上の問題であると同時に、戦中に青春をおくり、戦後民主主義の歩みと共に研究活動を開始した先生自身のアイデンティティの問題、また、そこから発して現代日本人全体の問題に重なるものだった。先生の著作(代表的なものとしては『魯迅と日本人——アジアの近代と「個」の思想——』朝日選書228 1983年 朝日新聞社 を挙げられる)を一貫する熱情の源泉はそこにある。

こうした意味で、先生は本来の意味での学者——学問思想と生き方がひとつになった人間——であったといつてよい。

恐らく、先生がキリスト者であるということも、このことと深くかかわっているだろう。「恐らく」というのは、先生が、平生、いかにもキリスト者らしい顔をするのを嫌って表にあらわさなかったからであるが、長年、近くから先生の言動に接してきた私には、先生のキリスト者としての信念というものが無言のうちに伝わってくるのだった。学問にせよ、知識にせよ、単なる技術であってはならない、技術を通じてある精神的理想を志すものでなければならない、そして、信仰というものも教会等の形式のうちにとどまっていたてはならない、その外に向って実践されねばならない、たとえば大学なら大学という学問研究教育の場において——というあたりの学問と信仰のかかりようを私は先生からうけとっていたが、いかがであろうか。

こうした先生の存在が東京女子大学にとっていかにかけがえのないものであったかは言うまでもないだろう。本学専任になられた当時、それまで広島大、和光大で大学改革等の仕事に骨身を削ってきていた先生は、「これで余生は女学校の先生として穏かにすごすのだ」などと冗談めかして知友に語っておられたそうだが、実際にはそれから十余年、キリスト教主義私立女子大学としての本学のために全力を傾けて尽されたのだった。本来の研究教育については無論のこと、これに加えて、現代文化学部新設に際しては、長年の理想であった日本、韓国（ママ）、中国の三国を東ねた東アジア文化総合研究の課程を地域文化学科内に創設すべく尽力され、また比較文化研究所主任を2期つとめて諸外国、とりわけ中国、韓国等アジア諸国との学術交流を促進、さらには教職員組合委員長を2期連続してひきうけ学内労働環境の改善、民主化をはかるなど、その幅広い、精力的な活動は目をみはるばかりだった。

だが、何といつても《虎丸先生》、《虎さん》の最大の贈り物は、その何とも言えず人なつこい笑顔、そして、気迫とユーモアの絶妙にブレンドされた話術にきわまるのではないだろうか。先生の笑顔とおしゃべりに接する度、春風に吹かれる思いに心和んだ諸輩は少なくないはずである。先生は常に東京女子大学のあり方として、マンモス化してはならない、官僚化してはならない、ひとりひとりの顔がみえる生き生きした共同体でなければならないと戒めておられたが、先生こそは、まさに、そうしたあるべき本学のあり方の見本のような存在だったのだ。その先生がとうとう本学を離れられることになった。この淋しさを何と言おうか。かつて、先生とふたり、「将来、定年になったら、ふたりで学寮の爺やにしてもらって楽しくやろうよ」などと話したのを私は思いだす。その夢よ　いずこ。